

研究ノート『プルーストを読む』

東京女子大学「学報」 1979年9月

《古いファイルノートを整理していたら、小さな切抜き
《が見つけた。「学報」昭和54年9月、と手書きの
《メモを見れば、勤め先で助教教授になった年である。》

マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』という小説作品の内部構造については、今まで多くの研究者・批評家が実にさまざまのことを言ってきたが、ひとの言うことはひとの言うことで、私としては、この小説に関わり合ってかれこれ十五年、いまだにその正体を見きわめたいと言いがたい。あるときは幾何学模様のように規則的な構造に見えたり、またあるときは原始林さながらの混沌と思われたりするのである。そして、いつ、どの頁を開いても、そこに脈打つ小説生命とも言うべきものには眼を見張らされ、時によっては圧倒されて気分が悪くなる。

そんな原始林と真っ向から取り組んでは、ただ自分を見失うばかりなので、私は私なりのテーマ研究というのを武器にしている。つまり、この作品にとってきわめて重要と思われるあるテーマを選び、観点をそこにしぼって、作品全体を眺め直してみるのである。こうすると、この混沌たる作品から、ある筋、ある規則性が浮かび上がってくる。もちろんそれは単にひとつの規則性であって、この多面的な作品のほんの一面を示すにすぎない。だが、そのようなテーマ研究を、次々観点を変えながら、何枚もの設計図のように積み重ねていけば、やがては作品の総合的・客観的把握に到達できるのではないか。

もちろん、そのような全体的把握はまったく到達不可能な遠い目

研究ノート『プルーストを読む』

東京女子大学「学報」 1979年9月

日

標にはちがいない。しかしこうして独断と偏見を混じえつつ少しづつ作品を噛み砕いていきながら、私は私なりにプルースト文学を我が物としている。プルーストの言葉を借りれば「この作品の中に自分自身を読み取る」作業をしているのだという実感を得ることができ。

いま考えているのは「夢」ということ。つまりこの作品に描かれて語られている夢が、全体構造とどのように関わり合い、それを反映しているか、考えているところである。

夢と言えば、ちやうどこの小説が書かれた頃、研究が著しく進歩したので、そのへんの一般常識や作家の個人的教養ということもふまえていなければならず、当面そうした勉強を心がけている。

それはともかく、純粹に文学的に見た作中の夢について、つい先ごろ、ひとつの鍵になりそうな思いつきをして、ひとりほくほくしているのだが、しかしこれはまだもったいなくて、ちよつと人に言う気になれない。

《懐かしくて読んでみたのはいいが、その「思いつき」という

《のが何だったか、どうしても思い出せない。「夢」に関する

《論文も書いていないから（これは確かだ）、大方、世事に

《埋もれ流されて日の目を見ずに終わったのだろう。

《…

《何とも遠い昔だ。

ホームページ掲載：二〇二一年九月二三